

第1回『2007 かわさき産業ミュージアム講座』

□日 時 平成 19 年 10 月 3 日(水) 18:30~20:30

□会 場 川崎区役所 7 階第 1・2 会議室

〔講演〕 水辺に育まれた川崎の産業 講師：長島 保

■ 講師略歴

県立川崎高校で長年教鞭をとる。退職後は、地域史研究者として、川崎市の市民アカデミーや各区市民館での講座、歴史研究会などの指導にあたり、川崎市史の編纂にも関わる。現在は、NPO 法人多摩川ミュージアム理事、かわさき産業ミュージアム専門委員を務める。

【前置き】

今、ご紹介をいただきました長島です。今日は、かわさき産業ミュージアム講座第1回目ということで、「水辺に育まれた川崎の産業」というテーマでお話をします。

まず、川崎の土地の個性は何かから考えたいんです。川崎というのはあまり特徴のないまちだと皆さん思われている。東京と横浜に挟まれた細長い地形です。地方に行って川崎から来ましたというと、「日本一の公害のまちか」とまだ言われます。公害がひどかったということは、実は公害を出した工場がたくさんあったということです。そして、公害をいろいろな努力で克服してきました。これは、市民の努力もあり、行政の努力もあり、企業の努力もあって、克服してきたわけですね。



最近「工都かわさき」はあまり流行らないんだそうです。「商都かわさき」とか、「音楽のまち・かわさき」とかいうわけです。私は、「商都かわさき」や「音楽のまち・かわさき」という言い方の中に、「『工都』に触れたくない」という下心があるように思うんです。私は堂々と、川崎の個性は「工都」であった、今なお「工都」なんだと主張し続ける必要があると思っています。

これからいくつかの問題を挙げながらお話をしますけれども、川崎は横浜よりも早く工業都市になっています。意外にそれに気がつかないんです。私は大田区に住んでいます。川崎の工業化が始まったときに、大田区は田舎だったんです。川崎の方が早く電灯の明かりを取り入れているんです。ですから、そういう意味で川崎というのは、歴史的に非常に進んだ地域なんです。同時に、「水辺都市かわさき」だったということ、そして、今もこの「水辺都市かわさき」がなくなっていないと言いたいです。多摩川や東京湾が消えたわけではありませんからね。「水辺都市かわさき」だった、そしてその水辺がまちの形成を促してきたんだ、ということをこれから話したいと思います。

水辺の風土をもった川崎、それと同時に、近代においては工都川崎として発展してきたんです。ですから、東京でもない、横浜でもない、そういう個性のある川崎を、もっともっと過去の歴史を振り返ることによって打ち出しているのではないかと思います。

私も去年あたりから、今年から来年にかけては工都 100 年だと言っています。今年から来年にかけてというのは意味があるんです。今年が明治製糖、詳しく言うなら横浜精糖ですが、その横浜精糖が多摩川の岸辺に工場を完成し、操業を始めたのが今から 100 年前の 1907 年です。明治製糖一つだけなら、私は工都 100 年などとは言いません。続いて、1907 年の末にはもう工場は出来ていたんですが、

翌年の1908年に操業をはじめたのが東芝の前身である東京電気です。ですからそういう意味で、横浜精糖が操業をはじめ、東芝の工場ができるということで、今年から来年にかけて工都100年とっています。100年という長い歴史があるんですから、2年くらいかけて工都100年と叫んでいたっていいんじゃないかと思っています。

私は昨年から、工都100年のモニュメントを造ろうと言ってきました。駅の北側に産業振興会館という市が所有している会館がありますが、あそこには記念碑も何もないんです。あそこにモニュメントの一つ造ったらどうかと言っていたんです。そしたら川崎市の中小企業関係の工業連合会の会長さんが、工業連合会でお金を出してもいいからモニュメントを造りたいと行ってきたんです。何回か会合を持ったんですが、会の中で反対でもあったんでしょうか、最近音沙汰がなくなってしまいました。私も言いだしっぺですし、来年1月に「工都100年ゆかりの人たち50人」という展示会を、駅前のリパークタワー3階にある「アートガーデンかわさき」という川崎市文化財団の展示場で行います。ところがこのほど、市民ミュージアムが「産業都市 川崎のあゆみ100年」という展示を開催してくれました。来年あたりはもっと呼びかけてシンポジウムなり講座なりをやるのかなと考えています。

前置きが長くなってしまいましたが、そんな思いをしているものですから、「水辺に育まれた川崎の産業」ということで、いくつかの問題を提起していきたいと思います。

1. 水辺都市かわさき

川崎市の面積は、現在144.35平方キロメートルです。実は、川崎市の面積は少しずつ増えているんです。現在はこの面積ですが、何年か経つと急に増える。それは、皆さんが毎日出しているゴミで埋め立てをしているからなんです。いま、第2期の計画が始まっていますが、それは出来上がっていないから面積に入っていない。これが何年かして完成すると、川崎市の面積が増える。川崎市の面積が増えるということは、川崎区的面積が増えるということなんですね。他の区はいくらがんばっても増えません。増えたら侵略ですね。そんなことはありえないです。



その川崎の市域の境を流れているのが多摩川ですね。実は、神奈川県の中で多摩川と接しているのは川崎市しかありません。ですから、川崎市だけが多摩川を占有しているんです。あとで強調しますが、多摩川があるからこそ川崎市は一つの個性をもったまちになっているんです。

もう一つは、出口が海に面しています。うなぎの寝床のように細長いとよく言われますが、その出口が海です。江戸時代までは、江戸前の海と呼んでいました。江戸市民は江戸湾とは言わず、江戸前の海とか江戸の海と言っていたんです。近代になって、東京という地名ができてから、東京湾と呼ぶようになりました。

川崎市は、多摩川と海に囲まれて成り立ってきました。それは単に地形がそうだっただけでなく、その住民、後の市民が、水辺のさまざまな恩恵を受けながら歴史をつくり上げてきたということです。そこで私が言いたいことは、かつての水辺都市をもういちど復元して欲しい、復元することを市民の一つの夢みたいなものにして、まちづくり、生活づくりに取り組んでいったらどうかということです。

2. 母なる川多摩川に育まれて

多摩川については、言い古された言葉ですが、「母なる川」なんですね。「母なる川」ということは、「ふるさとの川」でもあるわけです。

私事になってすみませんが、私にとっても多摩川はふるさとです。私は、東京で生まれ育って、そして、多摩川を越えて神奈川県に出稼ぎに来て、神奈川県知事から給料をもらい、東京で住民税を払ってきたんです。大田区が多摩川の岸边に住んでいて、川崎で高校の教員をやっていたから、多摩川には行ったり来たりしていました。それと同時に、川筋に生きてきた庶民の生活史や社会史などに興味を持ちまして、勉強をはじめたんです。そのようなわけで、多摩川は私にとってもふるさとです。

私は、銀座の木挽町で生まれました。水道の水で産湯を使ったんですが、水道の水は多摩川の水です。私が生まれたころは、利根川の水なんて使ってなかった。ですから多摩川の水で産湯を使って、世田谷の方に引っ越してきました。多摩川で泳ぎを覚えたんです。多摩川に入って、魚を取ったり釣りをして遊びました。ずっと多摩川のことに関心を持ちながら暮らしてきましたから、多摩川は私にとってはふるさとなんです。そういう意味で、「母なる川」、「ふるさとの川」なんですね。

その多摩川がこの流域にとって大事なことは、多摩川の水をたくみに利用して水田地帯を形成してきたことです。とくに幸区や川崎区には、自然の川はありません。平地帯を流れている溝や川は、すべて多摩川の水でした。幸区に行くと、一部鶴見川水系の矢上川に落ちる溝がありますが、二ヶ領用水に排水する川ですから、この川崎区には自然の川などどこにもないんです。川崎の平地帯には多摩川の分流である二ヶ領用水の末流が、毛細血管のようにいきわたっていたんです。そこに水田が広がっていました。そういう意味では、まさに穀倉地帯だったんです。

川崎については、梨の産地で「長十郎」がとよくいいますが、江戸時代から米の大事な産地だったんです。稲毛米と呼ばれて、江戸に出荷されて寿司飯になりました。今で言えば、コシヒカリです。そういうものの大産地でした。江戸の将軍も稲毛米を食べて、これはうまいと言ったそうです。それは江戸時代から戦前まで、明治、大正期も米の生産量が一番多かったのです。そういう意味での穀倉地帯だったのです。

もう一つ、神奈川の水には水道があります。これも、今年の講座でお話をしましたので深入りはしません。ただ、先日ちょっと耳に挟んだので言っておいた方がいいかなと思うことがあります。生田浄水場が何年かのうちになくなるそうです。なぜ、生田浄水場をやめるんですかね。神奈川県は水があまっているというのです。前回もお話しましたが、宮ヶ瀬湖ができ、従来の3つのダム湖と同じ量の水がめができて2倍になったそうです。そうすると、公益水道事業団の公団事業でやっていますよね。そちらからどんどん水がくるので、生田浄水場で多摩川の伏流水を浄水する必要がないというのです。ところが、何年か前に、異常渇水で、神奈川県もついに給水制限に追い込まれたときがありました。横浜、横須賀で給水制限をしました。実はあの時、川崎市は給水制限をしなくてもよかったのですが、横浜と横須賀の手前、しょうがないから東京都に水を分けてあげないと言って、私は大田区で分けてもらった水を飲んでいましたから、どうなることやらとずいぶん心配したのですが、そこまで行かないで済んだのです。あの時川崎市は、大師公園の噴水までとめました。噴水の水は循環して使っているのですから、止めなくたってどうってことはないのです。「なんで止めるんだ」って聞いたら、「市民感情で水の無駄使いをしているといわれるから止めたんです」と答えていました。そんなことをしなくても、実は川崎市にはちゃんと隠し水があったのです。それが、生田浄水場の多摩川から取水している伏流水です。いざというときにはそれを使えば、他からの水が来なくても十分に間に合います。そういう、将来の水飢饉に備えて、生田浄水場は残すべきだと思うのです。何とか生田浄水場はやめ

ないようにした方がいいんじゃないかということ、皆さんにちょっとお知らせしておきました。

①名産長十郎梨と伝十郎桃

多摩川の水に育まれて、この地域でさまざまな産業が発達してきました。

とくに長十郎梨は、砂質土壌の土地でよく生育するといわれていて、戦前の大師河原一帯は、有名な梨の産地でした。長十郎梨自体が大師河原で生まれたのです。なぜ、多摩川と関係があるのかというと、川縁の畑にたくさん植わっていたのです。川縁ですから、河川敷です。先日、多摩川が非常に荒れました。上流で700mm近い雨が降りました。とくに中流域はすごいですね。調布で警戒水域を越えましたが、あれは調布の地域が警戒水域ではなく、多摩川全体が危ないという意味です。調布の上石原には、多摩川の水量を決める一番基本になる観測所があります。そこが警戒水域まで上がったということは、下流の丸子の方だって危ないのです。では、さらに下流はどうか。これが不思議なことに、殿町はほとんど水位が上がらなかったのです。逆に大田区側の六郷鉄橋の下の運動場がものすごい水で、ゴミがたまったのです。船までひっくり返っていました。ですから、下流の方は水量によって流れ方が違ってきます。しかも幸いなことに、満潮と重ならず、干潮だったのです。ですから、そのまま水は流れていってしまって、殿町あたりはちょっとしか上がらなかったのです。私は丸子橋の周辺に飛んで行って写真を撮りました。すごかったですよ。堤防から堤防までがみんな川です。真ん中はすごい勢いで流れていました。

水が出たあとの一番の問題は何かというと、えぐみ、今で言うとヘドロの堆積です。運動場のヘドロを掃除しないとイケません。昔は、えぐみはいい肥やしになるから、そんな必要はなかったのです。ですから、水が出たときの方が梨の育ちはいいんです。変われば変わるものです。そういう形で、長十郎梨がたくさんつくられた背景には、多摩川が運んでくる沃土がありました。長十郎梨はもぎたてがさくさくしてうまいですね。今の幸水や豊水みたいにぐじゃぐじゃしていないですね。若い人は、今の梨の方がジューシーでいいなんて言いますが、それは昔の甘い梨を食べたことのない若者が言うことばです。そういうわけで、梨、桃、無花果など、果物の産地になっていたのです。

②水車、天然氷、河川漁業（鮎漁）

水辺だったからできるものとして、水車、天然氷、そして河川漁業があります。

昔は水車で米をついて精米したり、米の粉、麦の粉にします。その動力として水車を使いました。多摩川の水を直接水車に使うことはできなかったのです。二ヶ領用水です。二ヶ領用水にはあちらこちらに水車ができました。明治末から大正初期に、ある人が調べたところによると、75台の水車が稼働していたようです。ただ残念ながら、勾配がないと稼働しません。下流では流れが緩やかになり、川崎区では水車は聞かないですね。中原区から上流の方にたくさんできました。

それから、天然氷です。今は、機械氷で工場で作ります。昔は多摩川から水を取り入れた二ヶ領用水で結氷させたんです。とくに有名なのが、多摩区の長尾です。山すそを通過していた二ヶ領用水から水を引き入れました。水を引き入れるというのは簡単にできるんです。低いところを流れている川を高いところに上げればいいんです。どうするかというと、水を堰き止めます。堰を造ればどんどん水面が上がっていきます。高いところに水路を造れば、水が上がっていくわけです。二ヶ領用水にあちこち堰を造って、山すその専用の池に水を入れてそのまま凍らせる。今の気温では到底凍りません。ということは、昔は寒かったんですね。そうやって、結構厚い天然氷をつくりまして、凍ったらそれをのこぎりで切って、山かげに横穴を造って、そこを室にして、保存しておく。そして、夏になった

ら東京の間屋に出荷したそうです。長尾だけではなく、中丸子でも二ヶ領用水を使って氷づくりをやっていますね。私が住んでいる大田区でも、六郷用水とかあるいは湧水の水を使って、氷づくりをやっていました。やはり氷も、多摩川が育んだ大事な産業ですね。昔は、そういう氷を何にしたかという、もちろん保存用ですね。冷蔵庫の中に氷を入れて冷やしたんです。私なんかは熱を出したりすると、氷を買ってきて砕いて氷嚢に入れて使いました。あとで話しをする浅野総一郎は、富山の片田舎から出てきて、御茶ノ水の橋の上で氷水を売っていたんです。「冷やっこいよ、冷やっこいよ」と言って氷水を売っていました。そこから彼は一代で財閥を築いていくんです。

河川漁業、これは鮎漁です。鮎漁は江戸時代からある一定の地域を御留め場と称して、将軍に献上するための鮎を取る場所を決めていたんです。御菜鮎漁といって、将軍家の御菜に献上するんです。そして、鮎漁が面白いというので、将軍も多摩川に遊覧、見物に来ています。多摩川で鵜飼もやりました。多摩川の鵜飼は、徒歩鵜といって船を使わず、岸辺に立って鵜を放つんです。そういうことで、川漁の漁業者は、川崎にも、対岸の大田区や世田谷区にもいまして、近代になってから一緒に漁業組合をつくりました。明治20年には下流域24カ町村を網羅する漁業組合ができ、うち、川崎の市域が12カ町村です。村むらの漁師が加わっています。そういう鮎が、今年もたくさん遡上しました。一説によると、100万匹だとか200万匹だそうです。一体どうやって勘定をするんでしょう。100万匹というのは眉唾だと思っているんです。多摩川の堰の上に乗かって、委託されたコンサルタントが一生懸命目で見ながらカウンターで数えている。目で見ながらじゃ、正確には数えられないですよ。一時間にどれだけなんて計算しています。じゃあ夜中は見えないけれどどうするんだなんて悪口を言ったんですが、夜中は夜中で昼間出たデータに適当に掛け合わせるっていうから正確ではないですね。きちんと調査したわけではないのでわかりません。しかし、すごい量で上がっていることは確かです。岸辺で見ていると、どんどん上がってくる。この間の大水で、あれだけ上がっていたのがどこかに行ってしまった。いろいろなところに逃げたみたいですね。支流に上がっているんです。平瀬川の上流の方で、鮎をたくさん見かけたなんて情報が入ってきました。その支流にどれだけ鮎が逃げ込んだかは、全市的に調査した人がいませんからわかりません。

③東京・横浜の都市化に一役かった多摩川の砂利

意外と皆さんが気づかない問題に、多摩川の砂利の問題があるんです。今は、多摩川から砂利は一切採掘できません。これは戦前掘りつくしました。まさに乱掘です。実は戦前の鉄道敷設と、東京、横浜の都市化、まちづくりに、多摩川の砂利は重要な役割を果たしたんです。このことを意外と皆さんは知らない。砂利の歴史についてしゃべる人はいないじゃないですか。砂利のことを、江戸時代から跡付けて考えておく必要があります。

砂利は江戸時代中ごろから使われていたと文献に見えるんですが、では、どんなところに砂利が使われていたのでしょうか。普通、われわれが考えると、道路に砂利を敷きますね。しかし、江戸時代は道路に砂利を敷きません。砂利を敷くと荷車などがだめになるんです。道路に砂利を敷くようになったのは、近代になってからです。では、江戸時代はどんなところに使われていたかということ、江戸城の周辺、あるいは寺社の境内の玉砂利です。江戸の寺社の玉砂利のほとんどは、多摩川の砂利といわれています。

ところが、近代になってからの砂利の採掘が大変な量にのぼります。未だにそのトータルがわからないんです。いろいろなところから類推するしかありません。まず、明治五年の東海道線の開通があります。鉄道線路には、みんな石砂利が敷かれています。東京、横浜間はみんな多摩川の石です。と

くに、震災後の復興ですね。明治のころは、銀座などではレンガで建物を建てていました。その建物が震災でみんな駄目になったため、震災後は大きな建物は鉄筋コンクリートです。コンクリートの材料に砂利が膨大に使われました。それから工場用地の埋め立てです。浅野総一郎の埋め立て。浅野セメントが粉塵公害で深川から出ていけといわれて、川崎に来るわけです。実は、浅野さんが埋め立てをしたときは、セメント工場のセメントと砂利を使って囲いましたが、砂利は多摩川の砂利でした。

とにかく、都市を造っていくうえで砂利はなくてはならないものでした。公共建築物や工場などの土台にコンクリートを使わなくてはならないものがありました。そういうものに砂利がおびただしく使われました。最初は平たい小さな船を使った、手掘りです。手掘りをする人たちがたくさんいて、船がたくさんあって、航行するときに帆をあげて、それが多摩川の風物詩になるくらいに行き来していたんです。ところがそれだけじゃ足りないということで機械掘りが始まりました。機械掘りは、水を掻き出してすごいです。機械掘りになったら、船で運ぶなんて悠長なことは言っていられないから、鉄道を敷いたんです。私は玉電の沿線に住んでいましたが、あの玉電は昔は砂利電といって、ついでにお客を乗せていました。砂利の運送が目的でした。東横線しかり、多摩川の上流、今の西武鉄道や小田急線など、みんな砂利を運んでいました。

そして、川崎にとって忘れられないのは、唯一川崎を縦断している南武線です。この間、電車に創業80周年というステッカーが貼ってありました。昭和2年に南武鉄道ができたんです。先日、駅員の詰め所に行きまして、「最近南武線にステッカーが貼ってあるのを見かけないんだけどどうなってるんですか」って聞いたら、「あれはもう終わりました」と言われました。多摩川の築堤に関わった秋元喜四郎が南武線を創業する発起人の代表をやっていたので、そのことを書いて、南武鉄道80年のステッカーの写真を載せようと思ったのですが、終わっていて悔しい思いをしました。南武鉄道は、最初は多摩川砂利鉄道という名前で認可申請を出しているんです。後に南武鉄道になり、国鉄に吸収されます。こういう風に、多摩川周辺の私鉄は砂利と関わっていました。

砂利をあまりにも乱掘して川の様相を変えてしまったので、昭和9年に河川敷の中での砂利採掘は禁止されます。河川敷に対して人間の住んでいる方を堤内地といいます。そこで今度は、堤内地なら構わないだろうと掘り始めたわけです。とくに、東横線、東急が掘ってしまったところが、等々力緑地です。昔は十ぐらい池があったんです。今、5号池だけがフィッシングセンターとして残っています。ミュージアムやアリーナがあるところは、みんな池だったんです。東横線はあそこに引込み線を入れて、どんどん掘ったんです。

戦後はそうやって堤内地を掘り、上流の方もどんどん掘ってしまったので、まもなく全面的に多摩川からの砂利採掘は禁止になります。

④首都近郊の遊興地

次に、首都近郊の遊興地というのがあります。これも、川があり水があったからできました。江戸の文人墨客たちが盛んに来て、多摩川を題材にした風景、風物について作品を残しています

江戸時代に、村尾正靖が『嘉陵紀行』という紀行文を書いています。それから太田南畝も『調布日記』やいろいろな本の中で多摩川のことを書いています。

近代に入ってから、文士たちも盛んに行楽にやってきました。成島柳北が新聞で紹介したので、小向梅林は一躍有名になりました。それを聞いた明治天皇が、私も観に行くぞということで、明治17年に観梅においでになったんです。地元では行幸の記念碑まで立っています。そして、村の名前にまで御幸村と付けて、御幸村がいつしか幸区になったんです。明治天皇からずっとつながっているんで

すね。そういうことを考えると、地名はやたらに変えない方がいいんです。地名をたどりながら、歴史を語れます。それから、正岡子規がやって来ました。梨などをよく吟じています。川崎大師にも何回か来ています。「川崎を 汽車で通るや 梨の花」。「多摩川を 渡るや」というのが流布していますが、あれは間違いです。全集を三冊ひっぱりだして調べましたが、「多摩川を 渡るや」は出てきません。「川崎を」というのが正しいですね。それから田山花袋。江戸期の近郊の行楽地ということで、多摩川を非常に褒め称えています。とくに二ヶ領用水の風景の美しさを称えています。今はなくなりましたが、紀伊国屋という有名な料亭があった榎戸の十字路に、小泉橋という二ヶ領用水にかかる橋があります。その周辺のことを大変褒めています。北原白秋は多摩川音頭です。三十何連かにわたって、多摩川の名勝を褒め称えました。若山牧水だって、歌を詠んでいます。

文人たちの中には、多摩川で川遊びをする人がいました。川遊びというのは、屋形船を仕立てて、漁師に投網を打たせたり、あるいは鵜飼で鮎をとらせたりして、船上でてんぷらを揚げて料理をし、お酒を飲んで宴会をするわけです。川狩りともいわれていますね。そういうことが、戦前は盛んに行われていました。また多摩川の風物と一体になって寺社参詣も行われました。とくにお大師様は、厄除け大師ということで、江戸時代の後半から盛んにお参りにきました。お大師様に行くには、途中、多摩川に立ち寄りたり、いろいろなところで遊んで帰るわけです。寺社参詣と一体になった、行楽地としての多摩川が戦前はあったんです。

⑤ 岸辺にやってきた近代工場

川崎の多摩川の下流域の岸辺に最初にやってきた工場、これは先ほども言いました横浜精糖です。次いで、東京電気、のちの東芝です。そして、日本コロムビアで、日本蓄音機商会と書いていました。味の素、富士瓦斯紡績。これは、富士紡績と東京瓦斯紡績が合併して、富士瓦斯紡績になりました。富士製鋼、東京製鋼、明治製菓というように、みんな多摩川の下流に来ました。今残っているのは、数少なくなりました。味の素だけは世界の一流企業になって残っていますね。コロムビアも名前を変えていますけれど残っています。ほかは、どこかに行ってしまいました。東京製鋼や明治製菓などは、なくなってはいないんですが、川崎からはなくなりました。

横浜精糖が近代工場進出の最初で、工都 100 年だといっていますが、本当は近代工場が最初に始まるのはもっと古いんです。明治 21 年の御幸煉瓦工場。ここが、ドイツのホフマン式の輪窯と呼ばれる窯を使って大量生産をしました。ですから、近代工場の最初はここなんです。これを、工都 100 年の最初になぜしないかという、多摩川の川縁に一個所だけできても、工都にはならないからです。

実はこの御幸煉瓦工場も横浜製糖も東芝も、川崎区ではなく幸区に来ているんです。ですから、工都 100 年の最初の出発地は幸区です。そこをもう少し広げて、工業地帯として形成されたのは幸区から川崎区にかけてとした方がいいですね。

大事なことは、なぜ多摩川の水辺に工場が来たかということです。一つは、土地がものすごく安かった。河原ですから、安いんです。当時、東京の五反田あたりで工場にする土地を買おうとしたら、坪 10~15 円したんですね。河原ですから、1 円とか 1 円 50 銭です。ですから、何万坪とまとめて買えるわけです。

それからもう一つ大事なことは、昔は鉄道が発達しなかったし、トラックもなかったの、大量にものを運ぶのは船でした。船は江戸時代から大量輸送の根幹です。ですから、江戸時代は船の時代です。これは学校教育の欠陥だと思うんですが、日本の水運について教科書にはきちんと書いていません。市民の生活物資を運ぶのに、川と船がいかに重要な役割を果たしたかを学校できちんと教えて

いないのです。この川崎で見てみると、工場が立地したときは全部川筋なのです。さきほどあげたどの工場も、全部岸辺に荷揚げ場を持ちました。富士瓦斯紡績などは少し離れているではないかと思うかも知れませんが、離れていてもいいんです。工場との間にトロッコを敷いたんです。荷揚げをして、トロッコで運びました。東芝も同じで、今もトロッコ道が残っています。トロッコ道なんて書いてないから、誰も行ってもわからないです。私に聞かないとわかりません。そういうところを、徐々にわかるようにしていきたいと思っています。

このように川筋には企業の荷揚げ場があったんです。砂利も、矢向から南武線の引込み線が入ってきて、川崎河岸駅という駅がありました。そこへ船が入ってきて、砂利をじかにあけるようになっていました。そういう意味で、水運と絡んで工場が成立していたのです。その水運の最たるもの、港をもとにしながら、工場地帯を築き上げたのが浅野総一郎だったのです。ですから、多摩川沿いから川崎の海へと、工場地帯の造成は移っていきます。

3. 「江戸前の海」に育まれて

①干潟を大地に

川崎の海辺は、1km から 2km ほどの干潟が続く遠浅の海辺です。昔の地形図を見るとはつきりします。しかも恵み豊かな海だったんです。その海を利用して、いろいろな産業が成立しました。とくに明治になってから、大師河原の人たちは海苔養殖を始めました。江戸時代は、川崎の漁村には専門の獵師町はありませんでした。獵師町と磯付き村とは、厳然と区別されていたのです。専門の浦方と呼ばれるのが正式の漁村で、この境界では羽田です。獵師の字はけもの偏の“獵”を使います。魚をとるのは大変な技術がいるから、尊称、尊敬を込めて、“獵”の字を使うんです。生麦も獵師町です。それ以外の、半農半漁の村は、磯付き村といって漁を専門にはいけないのです。自分のところで食べる分と肥やしにする分は獲とってでもいいんです。貝などをとってきて肥やしにするんです。海草なども腐らせて肥やしにしています。そういわれても、実はこっそりとってきて売り始めるわけです。そこで羽田の連中が怒って、磯付き村の連中に裁判をもちかけた歴史もあります。ですから、磯付き村は公然と漁はできないのです。



②県下一の海苔養殖

明治になってから、そういう江戸時代の慣習はなくなりました。海を使うのは公有水面といわれ、監督官庁、ここでは神奈川に申請して許可を得れば、海面を使うことができるようになりました。そこで、大師河原の4人の人が、大森や品川の手本にして海苔養殖を始めたのです。それがみるみる発展していきます。最初は4人でしたが、大正時代の中ごろには、500軒近くになりました。大師の海苔養殖というのは、農家の副業でした。副業でしたが、やがてそちらが本業になり、農業は片手間にやるように逆転していくんです。大師地域の農家の人たちは働き者ですね。夏場はせつせと長十郎の梨や畑たまねぎなどいろいろな野菜を作り、秋口から冬にかけては海苔づくりです。正月などはそっちのけで、三が日でも潮がいいと出かけていくんです。最初は手積みですので大変だったでしょうね。海苔養殖をやっていた人の話で一番印象に残っているのは、海の水は温かいそうです。海から手をあげると、冷たくて凍えてくる。あまりにも冷たいのでどうしたかという、自分のおし

っこをかけて温めたんだそうです。この話はいまだに覚えています。

とにかくせっせとがんばって、神奈川県下第一の海苔漁場をつくり上げました。それがなくなってしまいました。なぜかという、埋め立てです。昭和47年までやっていました。東扇島の埋め立てが始まって、それですっかりできなくなって、漁業権を放棄して陸に上がったんですね。海苔養殖をやっていた人に、陸にあがってどうですかと聞いたら、海苔養殖をやりたいと言っていました。かなり近代化して、機械化までこぎつけたんです。川崎の場合は、種網をつくって売っていたんです。そういういろいろな技術改良をしたんですが、時代の波に勝てませんでした。工都川崎で海苔養殖というのは難しいですね。

③臨海地にやってきた近代工場

川崎の海辺に最初にやってきた近代工場は日本鋼管です。大正2年に創業を始めます。横浜の財界人だった若尾幾造が埋め立てをやっていた場所です。13万坪埋め立てをして、そのうちの3万坪を提供しました。その若尾新田の一部に日本鋼管が来ました。日本鋼管の設備はすべて外来のものです。ドイツから機械を輸入し、技術者も連れてきました。

次いでやってきたのが、浅野セメントです。浅野セメントは、大島新田とって、地元の青木さんという人が中心になって埋め立てたところなんです。青木新田とも言います。そこは果樹園にするつもりだったんですが、浅野総一郎からくどかれて結局売ってしまいました。そこへ浅野セメントがやってくることになります。

4. 臨海地域の埋め立て史

①浅野埋め立ての開始

日本鋼管だけでなく、その外側の海も浅野総一郎が埋め立てをしていこうと考えたのです。浅野総一郎は150万坪という、どえらい面積の埋め立てを計画します。そのとき、地元で小さな規模の埋め立ての権利を持っていた人たちが結構いたんです。そういう人たちの権利を、次々に買収していきました。若尾新田の残りももちろんですが、鶴見市場の戸長などをしていて、添田知義さんら8人が、27.5万坪の埋め立て権をもっていました。それから、町田の自由民権家の村野常右衛門ら16人が52万坪。こういう、先行する埋め立て権を全部買収しまして、合わせて150万坪です。海苔がとれなくなるのでダメだといって反対運動が起きたものですから、当初県は許可しません。それとともに、あまりにもスケールが大きいので、資金的裏づけがどうなのかということもあって、許可しませんでした。そこで、浅野総一郎は、安田財閥の安田善次郎や渋沢栄一の2人を引き入れ、ふたたび県に申請して許可をとることになります。150万坪という大きな埋め立ては、それまで日本ではなかったといわれています。

最初は埋立組合と言い、すぐに埋築会社になり、東京湾埋立会社になって、さらに東亜港湾工業という風になります。ですから川崎の港湾関係の仕事は浅野系の会社です。それは、浅野総一郎さんが、浅野埋立を行って先鞭をつけたからなのです。

②「金は海からすくう」浅野埋め立て

その浅野総一郎は富山県出身の村医者の子供でした。数えで24、満で言えば23歳で上京しました。はじめは氷水を売ったり、味噌を包む竹の皮を仕入れて販売したりしました。とにかくいろいろな物を買って儲けるのです。その際たるものはコークスです。当時ガス会社は、ガスを取るとき

にコークス、コールタールを捨てていたんです。そこに目をつけて、コークスがいい燃料になるということに気がついたんです。それを、王子製紙などに売り込みました。そこで、渋沢栄一に拾われるのです。もちろん、人物も買われたのだと思いますけれど、深川の官営のセメント工場の払い下げの口利きを渋沢栄一がやってくれました。浅野セメントが実業家としての第一歩になるのですね。

起業家精神が旺盛で、いろいろなところに手を出していきます。48歳のときに、東洋汽船の社長になります。その東洋汽船の仕事で、ヨーロッパの港湾都市を視察して回りました。向こうの港湾都市は大型船が岸壁に接続し、自動的に積み下ろします。とくに小麦の積み上げをどこかで見たんですね。船倉からホースでどんどん陸地にあげている場面を見てびっくりしました。要するに、横浜のように沖合いに停泊して、人間が肩に荷物を担いではしけから積み降ろしでは能率が上がりません。ですから、港と連結した工場が必要です。工業港湾都市をどうしても造りたい、そういうことに気づいて帰ってきました。それと同時に、自分のセメント工場を何とかどこかに持っていきたい、粉塵をまいても大丈夫なところはないかと探して回ったのです。

そこで、東京に近いところというので、この川崎の臨海地帯

川崎港の埋立状況



番号	地名	埋立企業	工期		埋立面積 (m2)
			着手 (年)	竣工 (年)	
(1)	川崎区南渡田町	浅野総一郎	大正 2	大正 9	3,074
(2)	川崎区白石町	浅野総一郎	大正 2	大正 15	390,878
(3)	川崎区大川町	浅野総一郎	大正 2	大正 15	462,481
(4)	川崎区扇町	浅野総一郎	大正 2	昭和 2	1,691,214
(5)	川崎区竹之下	浅野総一郎	大正 2	昭和 3	5,140
(6)	川崎区池上町	東亜港湾工業(株)	昭和 10	昭和 11	191,426
(7)	川崎区水江町	東亜港湾工業(株)	昭和 10	昭和 11	340,068
(8)	川崎区夜光 3 丁目	東亜港湾工業(株)	昭和 15	昭和 16	200,712
(9)	川崎区夜光 3 丁目	神奈川県	昭和 12	昭和 16	111,054
(10)	川崎区水江町	神奈川県	昭和 12	昭和 16	1,280,026
(11)	川崎区千鳥町	神奈川県	昭和 12	昭和 18	495,000
(12)	川崎区夜光 2 丁目	東亜港湾工業(株)	昭和 28	昭和 29	220,250
(13)	川崎区千鳥町	川崎市	昭和 28	昭和 39	1,443,133
(14)	川崎区夜光 1 丁目	東亜港湾工業(株)	昭和 34	昭和 35	393,595
(15)	川崎区小島町	神奈川県	昭和 32	昭和 34	660,852
(16)	川崎区浮島町	神奈川県	昭和 32	昭和 38	3,794,563
(17)	川崎区扇島	神奈川県	昭和 32	昭和 38	919,123
(18)	川崎区扇島	神奈川県	昭和 46	昭和 48	470,232
(19)	川崎区扇島	日本鋼管(株)	昭和 46	昭和 50	2,410,408
(20)	川崎区東扇島	川崎市	昭和 47	昭和 50	2,170,001
(21)	川崎区東扇島	川崎市	昭和 47	昭和 54	916,738
(22)	川崎区東扇島	川崎市	昭和 47	昭和 56	56,921
(23)	川崎区東扇島	川崎市	昭和 47	昭和 58	413,434
(24)	川崎区東扇島	川崎市	昭和 47	平成 2	797,821
(25)	川崎区浮島 1 期地区	川崎市	昭和 50	平成 8	924,900
計					20,763,044
(26)	川崎区浮島 2 期地区	川崎市	平成 7	工事中	730,000

を脚絆姿で物色して歩きました。その物色して歩いた姿が、銅像になっています。銅像は東亜鉄工の工場の中や浅野学園の校庭にあります。社員たちが十銭、二十銭と寄付をして建てたという有名な話があります。

そういう浅野総一郎が、本格的に埋め立てをはじめます。それがイギリスからの電気サンドポンプ、つまり浚渫船です。ホースで海水ごと土砂を吸い上げて、コンクリで固めた枠の中にどんどんあげていくというものです。そうすると、海底を掘り、深くなってそこが運河になる。どこかの山を崩して運んでくるわけではありません。周りからみんな集めてくるのです。ですから、浅野総一郎は自分のことを「廃物利用の神様」だと言っています。人がいないもの、砂なんかを掘りあげて土地をつくってしまっ、その埋め立てた土地がどんどん企業に売れて、儲かったわけです。「金は海からすくうものだ」とも言いました。これは伝記の中に書いてあります。

浅野埋立地への進出第一号は、旭硝子です。それ以後、昭和肥料、現在の昭和電工などが進出してきました。日清製粉などは、埋立地が完成しないうちから予定地を買うんです。海面を買う。鶴見の方に近いというので鶴見工場と名前を付けて、後で埋め立てが完成してみたら川崎市の大川町でした。川崎にあるのに鶴見工場かというのは、そういう理由なのです。日清製粉にはそのときに建てたサイロが、いまでも機能しています。いまや日清製粉は、日本一ではなく世界一の生産量を誇る企業です。

③公営事業となった埋め立て

戦前は民間の埋め立てから始まりますが、民間事業だけで埋め立ててはいけなと、県営、市営の公営事業が始まります。最初は県営です。県営の埋め立ては、戦前に夜光町、水江町、戦後に末広町、浮島町、扇島です。市営の埋め立ては戦後です。千鳥町などは、最初は県営で始めましたが、海軍工兵廠に移管され、さらに一部分が川崎市に移管されて、千鳥町の埋め立てになるのです。そして、東扇島、シビルポートアイランドです。今川崎市がやっているのは、ゴミ処分場の埋め立てだけです。東扇島の埋め立てはすべて平成2年に完成しています。それ以後の埋め立てはゴミ処分場しかないでしょう。

⑥高度成長を支えて

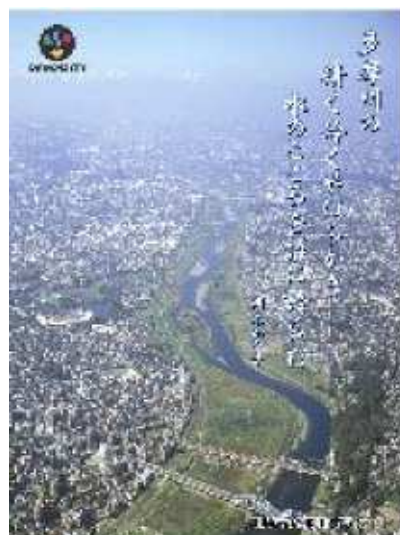
戦後の埋立地に、当時日本で最大の二つのコンビナートが成立します。千鳥町に日石化学グループ、浮島町に東燃石油化学グループです。実はこれが高度成長を支えたのです。もちろん、日本鋼管を中心とした鉄鋼もあります。川崎の工業地帯が高度成長を支えたのです。

ところが、高度成長の負の側面である公害の問題が発生します。特に、亜硫酸ガスによる大気汚染が深刻になりました。それに対して、川崎は大変な取組みをせざるを得ませんでした。公害病患者がたくさん出ました。公害を無くす会、公害友の会などができ、いろいろな市民運動が起こりました。そして、川崎市は行政として、大変厳しい公害規制をやりました。国よりももっと厳しい公害規制をやったといわれています。

そういう川崎をこれからつくり変えていくのは、水辺（都市）の復原ではないかと思えます。

5. 水辺（都市）の復原

最近川崎市は「母なる川」を、市政の眼目にしてまちづくりを



していくという方向を打ち出しています。それが「多摩川プラン」です。

「川とふるさとの再生、市民協働による多摩川ライフの創造」という理念で、「川崎の母なる川・多摩川」の魅力を流域の一人ひとりの市民が共有し、「豊かな自然環境と多様な生命（いのち）が共存しうる新しいライフスタイルを創造することを目指します」ということで、総合的な「多摩川プラン」をつくりました。市役所の多摩川施策推進課に行くともらえます。策定するにあたって、私も策定委員になり、いろいろ注文を申し上げてきました。そういうことで、今川崎市は多摩川を市政に取り入れたまちづくりを目標にして、多摩川を市民の共有財産にしていこうという画期的なことを進めています。川をこれだけ克明に取り入れてプランを立てた自治体はありません。ただ、プランだけで終わっては困ります。これを実行しないとイケません。実行段階でどうするのかという見通しも、書かれています。それは、市民と協働で進めていくのです。行政だけではできないので、市民の力を借りてやっていくんだという市民参加のまちづくりに、川崎市は取組み始めたということです。

それから海の問題です。海は、この川崎区が産業ミュージアム構想で数年前から取組んでいます。なかなか市全体のものにならないのが残念です。多摩川は、もう市全体になっています。海も区だけで終わらせてはいけないと思います。海辺の復権です。川崎の海について、どれだけ私たち市民は知っていますか？浅野埋立地を歩いたことがある人はいますか？勤めていた人は例外ですが、一般市民で浅野埋め立て地、扇町や大川町を知っていますか？埋立地は、行っても岸壁に出られないのです。ところが最近、東芝が粋なことをやってくれました。工場の一部を割いて臨海公園を造ってくれたのです。だから公園に行って、たっぷり海を眺められるようになりました。実は、古い埋立地は全部企業の岸壁になっていて市民は入れないのです。昔は川崎の海は市民が自由に行って、眺めることができました。ところが、現在は市民から遠ざけられてしまったのです。私はもっと市民に開放して欲しいと思います。東芝がやったように、せめて一部分だけでも公園を造ってもらいたいのです。

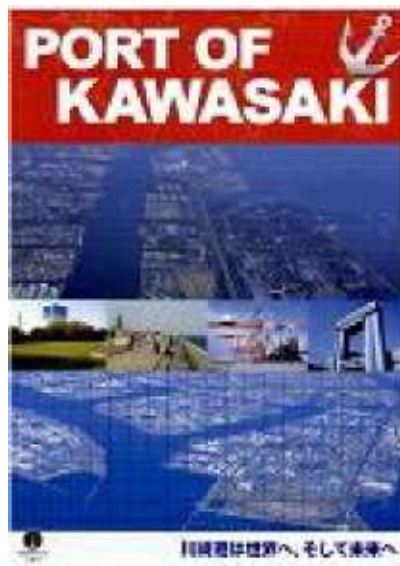
大川町に中小系の工業団地があります。あそこは、川崎市が市内の企業を集めて造っただけあって、田辺運河のところだけは細長い公園になっています。そこが唯一、海辺の運河に近づいて、扇町の東洋埠頭や昭和電工を眺めることができるのです。そのようなものを水江町あたりにも造って欲しいと思います。水江町には、扇島へ渡る海底トンネルがありますが、一般車は通行禁止で、日本鋼管の車と許可を得た車しか通れません。川崎市の新総合プランでは、内陸から行く道路、さらに海底トンネルをつくって東扇島につなげる計画を立てたようです。そうすると、東扇島にはもう一本道路ができます。できるなら、自転車で行かれるようにする。今でも、海底トンネルを自転車で行けるのかも知れませんが、もっと市民が安心して近づけるような臨海地域にしてもらえないかということを行っているのです。

同時に、あそこにはたくさんの企業がありますから、産業ミュージアムにならないかということですね。つまり、いろいろな企業がもっと工場の中を開放して、「わが社ではこんなすばらしいものを造っているんだ」ということを市民にPRしてくれないか。かつて、日本鋼管の圧延工場をみて感激しました。大掛かりなベルトコンベアーに乗って、真っ赤な熔鉄のじゅうたんが送られていくのです。途中で水をかけるから蒸気がもうもうと立って、下手な芝居を観ているよりもずっと面白い。あつけにとられて見とれました。ああいうようなところをもっと見せてくれれば、力強い産業だということが市民感覚としてわかります。そういう意味で、もっともっと埋立地を開放してもらって、産業ミュージアムとして市民が気軽に出かけられるようにしてほしいと思います。

東扇島は市が埋め立てて、工場ではなくて物流拠点として整備したので開放的ですね。そして、東公園と西公園ができました。東公園は緑をもっと豊かにして人工の海浜を造るそうです。今川崎には

自然の渚がひとつもないんです。ですから、人工の海辺をつくるそうです。とくに、東扇島を中心に、開かれた臨海地帯へということが進みつつあります。それをさらにアクセスなどの面で、市民が行きやすいようにして欲しいと思います。東公園と西公園を結ぶ散策道路など、すばらしい緑道ができています。すばらしいですが誰も歩いていません。ですから、もっともっと私たちは臨海地帯に目を向けて、市民が近づけるような臨海工業地帯になってほしい、そのためには、川崎区がいろいろ努力しているこの産業ミュージアムの活動を全面的に支援していきたいと思っています。

「Port Of Kawasaki」という資料は、港湾局に行くともらえるんですが大変よくできています。埋め立ての状況などが出ていてよくわかるので、両面をコピーして今日配布しました。ここには、市民の利用施設ということで、先ほどお話した人工の海浜が載っています。東扇島東公園は国の防災拠点になるんです。普段は空いているわけです。いざというときに使うのです。ですから普段は市民が利用できるよということ、両方を兼ねています。海浜になって泳いだりできます。これが、来年度完成する。最近きれいになったのが千鳥公園です。あそこに行って京浜運河を歩き来している船をぼーっと眺めていると、1、2時間経ってしまいます。いろいろな船が京浜運河を通るんです。あそこも大変きれいに整備されました。以前は草むらだらけで入るのもいやでした。



他に、マリエンやマリンプラザなどという市民施設が紹介されています。マリエンの1階には、地元の人たちが中心になって、海苔養殖の道具類を並べた展示コーナーがあります。展望室に行くと、臨海工業地帯が360度見渡せます。東扇島は、徐々に市民に開放されつつあるんです。ですから、もっともっと市民が行くといいです。そこでは、海苔漁業を保存する会の方々が、毎年海のまつりをやっています。そのときには、海苔漉き体験できるレクチャーがありますし、バザーもやっています。

「川崎の海の歴史保存会」が中心になって行うイベントです。そういう意味で、もっと私たち市民が、身近に海を感じとって、かつての川崎の海がどれだけ自然の恵み豊かなところだったのかを確かめたいですね。そのような海の歴史の中で、現在の工場があるわけです。そういう川崎の海辺のことを私たち市民は知りたいんだという声を、もっと大きくしていただければいいなと思います。

【質疑・応答】

Q：私は鶴見に住んでいますが、海辺に関心があるので行ってみようと思うんですが、川崎よりも鶴見の海辺の方が行きやすく親しみがありません。というのは、鶴見川の河口や海芝浦の話が出ましたね。あそこは行く足があるんです。ところが、大川の日清製粉の工場に行こうと思うと、武蔵白石から鉄道が出ていますが、朝と晩の通勤時間しか電車がなくて行く足がないんです。川崎のマリエンも1、2度しか行ったことがありません。PRが足りないというか、行きやすい方法が一般市民に知られていない。浮島にバスで行って見たら、向かい側が羽田空港なんですね。ああいうところでしばらく横になって海を眺めたことがあるんですが、もっと親しく気楽に海辺に行ける方法がないのかと思います。私も関心があるので行ってみたいのですが、さっきのトンネルの話ではないけれど、川崎の海辺は行きにくいんです。

長島：おっしゃるとおりだと思います。大川支線は日本一短い支線だったといわれています。日清製粉に行くには、二つ方法があります。一つは歩く。歩いて一駅ですから、たいしたことはない。

もう一つ、歩くのがちょっとしんどいという方は、川崎駅前から日清製粉行き直通バスがあります。東扇島はバスしかないです。実は、先ほどお見せしたように、いい冊子ができているけれども、どうやって行ったらいいかはどこにも書いてない。今おっしゃったように交通機関、どう行けばいいかのPRがとくに遅れていますね。

Q：そのパンフレットも欲しいんですが、どこに行ってもらえばいいのかがわからないんです。

長島：パンフレットは、次回、港湾局に行ってもらってきます。このパンフレットはよくできています。

Q：そういう行政の方の目を一般市民に向けてもらえば、もっと親しみがわくんです。

長島：ひとつ言い忘れたことがあります。よく、まちを緑で覆うということを言いますね。工場に緑とか、まちに緑と言うんです。私は、緑というのは水があって初めて映えてくる、だから水と緑はセットでやらないといけないと思います。緑化するという事は、水も同時に考えないといけないんです。

今、川崎市の財政もピンチですから、下手をすると夕張市になるんじゃないかという人もいますけれど、将来いずれまた好転する時期もあるでしょうから、たとえば埋めてしまった用水を掘り起こして復原してもいいのではないのでしょうか。そこに並木道をつくる。全部を道路にしなくてもいいわけです。大田区はなくなってから気がついて、六郷用水を街中に復活したんです。おもちゃみたいな水路ですが、おもちゃみたいでも水があって緑があってはじめて心がなごむ。浮島町には先端に公園が一つあるんです。あそこは川崎区の市民健康の森で、海風の森をつくろうと市民が頑張っています。そこにビオトープをつくりました。あれはいいですね。少し先に釣り園もできているんです。皆さん、ぜひ行ってみてください。

Q：横浜に住んでいるのですが、二ヶ領用水が好きなのでよく自転車で走ります。ここに出ている二ヶ領せせらぎ館というのがどこにあるのか教えてくださいませんか？

長島：南武線の駅で言うと登戸駅です。多摩川の堤防沿いにサイクリングロードをどんどん行きますと、登戸駅の近くに宿河原堰という堰があります。その堰のたもとにありますので、すぐわかります。ぜひおいでください。

Q：多摩川はかなり蛇行してますね。大師河原が今の堤防の中にあって、梨畑もそちらにあったと聞きましたが本当ですか。

長島：現在の堤防工事をしたときに、梨畑がだいぶつぶされたんです。羽田の方は削れなかったんです。何とか梨畑などをつぶさないように堤防工事をしてくれと、当時内務大臣をしていた地元出身の代議士で、政友会の総裁にもなった鈴木喜三郎に嘆願したのです。ところが鈴木喜三郎は、「俺は、一地域のために政治をやっているんじゃない。そんな地域の問題を俺のところに持ってくるな」と言って取り合わなかったそうです。そうしたら、選挙民が怒って次の選挙のときに落としてしまったのです。彼が当選していたら、あの時政友会は第一党でしたから総理大臣になっていたかも知れません。ですから、総理大臣になりそこねた男が川崎に一人いたことになります。

Q：等々力公園も多摩川の内側ですか？

長島：あそこは、江戸時代に直線化したんです。ですから、今の湾曲している方に川が流れていて、等々力は対岸でした。東京に等々力というところがありますね。あそこ一帯でしたが、分断されて飛び地として残りました。それは、江戸時代の中頃に田中休愚があそこを直線化したから、こちら側に「もとの堤外地」(※)が残ったんです。川の蛇行と村の分断というのは、たくさんあります。同じ地名が数多く残っていますね。古市場などは川崎には残っていますが、大田区に

はなくなってしまった。大田区は地名を変えたりしたので困ります。川崎には沼部も残っていれば、沼部も残っています。古い地名が残っていると、こういう歴史があったんだと地名を通してわかります。地名は歴史を伝えますから、よほど変な地名は別ですけどもやたらに変えない方がいいですね。

Q:この間等々力の川崎市民ミュージアムを見てきました。大師河原の埋め立ての契約書の原本とか、川崎の古い木製の水道管などもありました。先ほど、工場が進出してきたとお話がありましたが、最初の市長さんが企業を誘致した面もあるのではないのでしょうか。味の素の工場見学があって、歴史などを見てきたんですが、工場団地などをつくって工場を誘致したところもあるようですね。

長島：まちの政策として、工場誘致というより工場招致と呼んで、初代市長の石井泰助さんや最後の川崎町長の小林五助さんなどが中心になって盛んに運動をしました。ところが、石井泰助さんは大地主なんです。企業がくると、土地の値段が上がるからという地主たちの狙いもあったのです。また、味の素の場合は、向こうで公害を出したので、葉山、逗子の御用邸の海を汚すとは何事だと言われて、最初は六郷に工場を造ろうとしたんです。そうしたら、東京が反対をした。そのときに、石井泰助さんらが呼んだといういきさつがあります。

(以上)